
高齢外来維持透析患者の在宅看取りを経験して

医療法人衆和会 大村腎クリニック

○朝長美幸 新名加代子 藤田なつみ 青柳真生 中村麻美 白井美千代 中村麻衣子 前川明洋 船越 哲

【背景・目的】

透析患者の高齢化が進み、人生の最終段階において自宅で最期を迎えたいと希望する患者は少なくない。当院は2020年7月に開院、2023年12月までに高齢外来維持透析患者の在宅看取りを希望する3症例を経験した。地域包括ケアシステムの中にあつて、在宅医療・介護との連携を構築するまでの経緯を振り返り、今後の連携強化に繋げる。

【症例1】

90歳台女性、2019年PD導入。全身状態増悪となり在宅看取りを本人が希望し、家族も同意された。在宅医療体制を調整中に自宅で急変し永眠された。

【症例2】

70歳台男性、2017年APD導入。脳梗塞後遺症にて誤嚥を繰り返していた。本人と妻が在宅看取りを強く希望され、在宅医療体制を調整中であつたが、誤嚥性肺炎で入院し永眠された。

【症例3】

80歳台女性、2020年HD導入。加齢によりADL低下、透析困難症を呈し、医療チームと家族間で透析見合わせとなった。在宅看取り医も含む訪問医療が介入し、家族に見守られ永眠された。

【考察】

今回、在宅看取りを実現できた症例は3例のうち1例のみであつた。早期より患者・家族の意思を確認し、在宅医療・介護を提供できる体制を整えることが重要と思われた。